すごろくで遊ぼう！

―浮世絵・玩具絵

（令和元年十二月二〇日―令和二年一月十五日 開催ミニ展示鑑賞ガイド）

版元 松江市殿町 松江歴史館

一、ふりはじめ

正月あそびの定番、双六（雙六）。今ではこどもの遊びというイメージが強いですが、江戸時代には流行の役者を紹介したり、社会風刺をとりあげたりする双六は大人のたのしみでもありました。本展では、当館の収蔵品（寄託品含む）より幕末から明治にかけて作られた絵双六（浮世絵）を紹介します。

二、双六の始まり 盤双六

みなさんが「すごろく」と聞いて想像するのは、さいころを振り、出た目の数だけ絵の上のコマを進めていくものではないでしょうか。それは「絵双六」といい、江戸時代に入ってから広まったものです。それ以前にも「すごろく」と呼ばれるものがすでにありましたが、絵双六とは異なる遊びで盤上の石を動かし、対局する複雑なルールのゲームでした。この「盤双六」は平安時代には貴族階級の間で広く行われ、次第に大衆も行うようになりましたが、時代の移り変わりとともに廃れていきます。

盤双六遊びの様子（増川宏一著『すごろく I』（法政大学出版局、1995年）より転載）

三、絵双六の登場

江戸時代になり、盤双六が廃れるとともに登場したのが絵双六です。ただ絵双六は盤双六と直接的に関係はないといわれ、絵双六のさきがけとなったのは「仏法双六」「浄土双六」という、仏教の教えを説いたものでした。

四、様々な絵双六

江戸時代にはじまった絵双六は明治、大正、昭和にも作られていき時流にあわせ様々なジャンルのものが生まれます。江戸時代には、名所・道中双六、役者・芝居双六や、和歌や文芸などをとりあげたもの、町人の立身出世にまつわるものなどが作られます。明治期になると文明開化双六や、学校教育に関するもの戦時下には軍事教練にまつわるものなどが作られ、時勢を伝えるとともに教育の意味も果たしました。近代には、双六は雑誌の附録として広まり子どもたちのもとへ届きました。

「三十六歌仙雙六」（松江歴史館蔵）

五、絵双六を描いた絵師

絵双六の流行は出版文化の展開と密接に関わっています。江戸時代には、名のある浮世絵師によって描かれ、版元から出版されていきます。

本展に出陳の「新板娘庭訓出世雙六」の作者でもある渓斉英泉はこのほかにも「東海道五十三駅名所旧跡行程記」などを作っています。

「新板百人一首むべ山雙六」を描いた歌川豊国は「源氏物語双六」など数々の双六を手がけ、四代豊国に至るまで道中双六や芝居双六を制作します。他にも、歌川広重や歌川国芳などよく知られた浮世絵師によって双六が作られました。

上り

みなさんもぜひ年末年始はすごろくで遊んでみてはいかがでしょうか。

〈松江歴史館　お正月のイベント〉

◆正月あそびコーナー（元旦～3日）

◆新春プレゼント（元旦～3日）

基本展示観覧者にお茶をプレゼント（大人各日先着30名、中学生以下の観覧者全員）

◆書き初め（2日9時半～15時半）

参加無料、当日先着受付順

〈主な参考文献〉

◇高橋順二編著『日本絵双六集成』（柏美術出版、一九九四年）

◇加藤康子他編著「幕末・明治の絵双六」（国書刊行会、二〇〇二年）　ほか